

# センタージャーナル

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016  
名古屋市中区橘二丁目8番55号  
TEL (052) 323-3686  
FAX (052) 332-0900



浪江町請戸から望む福島第1原子力発電所。ここから発電所までは直線距離で約5km。(6面・7面の研修時に撮影)  
(写真の無断転用はご遠慮ください。)

立つ！  
いのちの大地に  
聞く！  
いのちの叫びを

真実の学びから、  
今を生きる「人間」としての  
責任を明らかにし、  
ともにその使命を生きる者となる。

## もくじ

- ・聖典研修 第19・20回  
『仏説阿弥陀經』  
—その教義と真宗の儀式— ②・③
- ・尾張の真宗史  
真宗門徒とお内仏の歩み ④・⑤
- ・現代社会と真宗教化  
何を「忘れない」のか？ ⑥・⑦
- ・INFORMATION ⑧

◆100号記念特別付録  
親鸞聖人・本願寺関係略系図

## 無縁の大悲

一九九一年四月十五日に創刊された「センタージャーナル」が、一〇〇号を迎えた。紙面を通じて諸先輩・諸氏方が、その時代の非常を身を感じ、こころを傷め本気で悔いてきた姿が見られる。そして同時にその姿が如來光明となり、常にこの身を照らし続けて下さる事に頭が下がるのである。

た御堂。その御堂に、苦悩の中にあつて念仏を称え、生きる意味と歓喜を回復していかれた、その人々との想い出が涙となって現れたのであろう。

莫大な国費を投じて行われてきた除染作業が進み、この四月から帰還困難区域が大幅に縮小されるという。しかし思い出の場所は除染により姿を変え、放射性廃棄物の山となっている。もうすでに元の故郷ではない。どんなに辛かっただろう、どんなに悲しかっただろう。そうして、それはこれからも続く。

本誌六・七面を取り上げさせていだいた災害ネットワーク事前研修で、佐々木道範さんは、境内の桜を除染のために伐採した時のことを話して下さった。「幼稚園が開園して以来、ずっと子どもたちを見守り続けてきた桜の樹。何度も除染を試みたが、どうしても線量が下がらない。一年間悩み続けた末に伐採を決意。伐採は、桜にとどまらず、爺ちゃんが大事に育てた庭樹のほとんどを伐採しました。今までそれほど感じなかったが、伐る覚悟を決めた時、初めて美しいと感じました」と、語って下さった。

「何を『忘れない』のか？」(本誌六・七面)の問いかけに対し、木ノ下秀俊さんは、「みなさんが守りたい、抱きしめたいと想ったその人とその想いを『忘れない』でください」と語られた。失って初めて気づく大事な人、大事なこと。哀れにも自身の愚かさが照らされる。罪業の身を生きるあいだ、悲しみは続く。

その話を聞かせて戴きながら、お預りする恵林寺の再建工事の時のことが思い起こされた。祖父が十八歳で都市開教のもと建立した本堂を、父が「重機で壊してはならん。柱一本、壁板一枚に御門徒の念仏の声が沁みているから」と手壊しで行った。その作業を見守りながら、家族皆で止めどなく涙を流した。私が生まれる前から開かれていた開法道場。幼い頃、境内で兄と野球やサッカーをする姿を見守ってくれ

一つには衆生縁、これ小悲なり。  
二つには法縁、これ中悲なり。  
三つには無縁、これ大悲なり。

(『真仏土』聖典三二五頁)

せっかく戴いた悲しみであるから、その悲しみを縁として「後生の一大事」を忘れるなど如來は、我が小悲を包み常行大悲していただくのである。

(主幹 荒山 淳)

## 聖典研修

## 『仏説阿弥陀經』―その教義と真宗の儀式―

第十九回 二〇一六年十一月十七日(木)

## 天樂地華・化鳥風樹莊嚴

講師 廣瀬 惺氏 (同朋大学特任教授)



## 聞法生活の内容

れより西方に、十萬億の仏土を過ぎて、世界あり(『聖典』一二六頁)の仏であります。

依報莊嚴には四種の莊嚴が説かれていますが、その根本は、前回までお話ししてきた「宝樹莊嚴」と「宝池莊嚴」だと言えます。と申しますのは、これらの莊嚴の冒頭が「極楽国土には」(『聖典』一二六頁)と始まるのに対して、「天樂地華莊嚴」は「かの仏国土には」(『聖典』一二七頁)、「化鳥風樹莊嚴」は「かの国には」(同頁)と、変えられています。そこに、前の二種の莊嚴(宝樹・宝池)を後の二種の莊嚴(天樂地華・化鳥風樹)が、さらに豊かなこととして開いていつているものと受け取れるわけです。その内容を少し確認していききたいと思います。

まず「天樂地華莊嚴」ですが、素晴らしい音楽が奏でられる中、空から降ってきた曼陀羅華を衣被(華皿)に受け、他国の十萬億の仏を供養するという事です。ここの「十萬億の仏」とは、極楽莊嚴が説かれる冒頭に説かれていました「こ

善導大師はこの個所の「過ぎて」を「超過して」と釈しておられますが、一度は超え過ぎた十萬億の様々な価値観の世界を讃え敬う(供養する)ことが「天樂地華莊嚴」の内容だといえられます。過ぎた世界がもう一度復活してきているわけです。浄土に身を置いた者は、様々な価値観の世界を切り捨てるのではない。それらを敬い学ぶ中で、人間の事として本願の信心を明らかにしていくということです。「行巻」をご覧ください。

台教の祖師山陰 慶文法師の云わく  
律宗の祖師元照の云わく  
『聖典』一八四頁

等として、親鸞聖人は諸師の文をお引きになる中で、わざわざ宗名を挙げておられます。様々な思想・宗教と縁を切るのではなく、それらとの関わりの中でいよいよ念仏の心を明らかにしていく。念仏に生きていかれた方々というのは、そう

いう一つの柔らかさを持つておられたのではないのでしょうか。

ただし大事なことは、「すなわち食時をもつて、本国に還り到りて、飯食し経行す」(『聖典』一二七頁)とありますように、食事の時間になれば浄土に還つてきて、食事を摂るということです。『願生偈』には「仏法の味を愛樂し、禪三昧を食とす」(『聖典』一三六頁)として、仏さまの智慧をいただくということが説かれています。このことは、教えの学びをはずさない。すなわち日々の読誦を示していると言えます。それをはずさないということです。そういうことで「天樂地華莊嚴」は、聞法生活の内容をさらに豊かに説くものといえられます。

## 時代の問題を通して

次の「化鳥風樹莊嚴」は「化鳥」と「風樹」が一つのこととして説かれています。が、経文を見ますと「変化して作したまうところなり」(『聖典』一二八頁)までが「化鳥莊嚴」。そして「舍利弗、かの仏国土には」(同頁)と改まって「風樹莊嚴」が説かれています。そのことからして、二つの莊嚴を一つにして説かれていると言えます。

「化鳥莊嚴」で、「鳥」として説かれているものは、念仏に生きる人の自在性でしょう。法が開いてくる無碍性と言えます。そのことを、特に表しているのが「共命鳥」です。考え方が真反対、個性も全

く違う二つの頭が、一つの体で生きていくという存在。それは、私たちの世界では共に生きていくことはできません。しかし、浄土においては共命鳥として、共に生きていくことができます。ですから、自在ということは、全ての在り方を認めるということがなければ成り立たないということでしょう。排除があるところに自在ということはあり得ないわけです。

そして「風樹莊嚴」ですが、これは風が樹に当たると樹から微妙な音が出るというものです。私の了解で申し上げれば、この「風」は時代社会の問題等様々な問題を表している。そして「宝樹莊嚴」のところでお話ししましたように、「樹」は聞法生活を表します。つまり、様々な問題を通して、仏法を聞いていくということです。

どのようなことを問題としていくか。それは各々においての事柄であり、個性でしょう。そして、問題を通して方向を見出していくところには、各人の悪戦苦闘があります。また、それぞれのところで表現されていく仏法には表現上の異なりを持つてきます。社会問題に比重をおいて問題とする人、一人一人の抱えている悲しみを問題とされる方など、それぞれが抱えておられる問題を通して、表されてくる仏法の表現は違ってきます。同じ本願をいただいても、それぞれの色を持つてくる。そういうわけで「風樹莊嚴」の内容とは、問題を通しての仏法の表現といただくわけです。

第二十回 二〇一六年十二月九日(金)

## なぜ臨終来迎は自力なのか

講師 竹橋 太氏(儀式指導研究所研究員)



## 思い通りの人生?

前回、親鸞聖人は臨終来迎について、有るか無いかで判断しておられないということをお話ししました。引き続き、臨終来迎の背景にある私たちの問題を、親鸞聖人のお言葉とともに考えていきたいと思えます。まず『末燈鈔』をご覧ください。

来迎は諸行往生にあり。自力の行者なるがゆえに。臨終ということは、諸行往生のひとにいうべし。(中略)

この自力の行人は、来迎をまたずしては、辺地・胎生・懈慢界までも、うまるべからず。このゆえに、第十九の誓願に、諸善をして浄土に回向して往生せんとねがうひとの臨終には、われ現じてむかえんとちかいたまえり。

『聖典』六〇〇頁

これはつまり、臨終来迎は自力の者にあるということです。親鸞聖人は文中、修諸功德の願と言われる第十九願に触れておられますが、これは要するに自分が思う善いことをすることによって浄土に生まれようとする、私たちの問題に應える

願です。自分が想定する善が中心にある時には、お念仏も救いの原因になってしまふのです。お念仏という善いことをしたから救われる、そういったことを大切に

ここで述べられる第十九願の姿なのです。私たちは自分の善惡そのものを問題にせず、その善惡に沿うような形で人生を受けとり、理解します。それが私たちの暗さだと思えます。頑張つて努力して、善いことをして、結果が出なければ納得できない。そして納得できなければ、自分の人生を受け取ることができず、「これは本当の私の人生じゃない」と、自分で自分を苦しめ続けることになります。本当の自分と、今の自分とは違うのだと、自分が分離してしまふのです。

こういった問題の一つの応えとして、「臨終来迎」や「生死輪廻」ということが説かれてきたのだと思えます。例えば、努力をしても全く結果が出ない時、「あなたの人生がうまくいかないのは、前世で罪を犯したからだ。でも現世で頑張っているから、次の世では必ず幸せになれる」と言われたらどうでしょう。首をかしげるかもしれませんが、人間はこういった

努力が報われないことの理由を求め、納得してきたのでしょう。そして、努力が必ず報われるということを願うのでしよう。そういった煩惱が死後の救いというものを生み出してきたのではないでしようか。善い悪いではなく、往生浄土にはこういった側面もあるということ、親鸞聖人は「自力」という言葉を用いておっしゃっているのだと思えます。

## 自力と他力

こういった問題を考えていく上で、善導大師が『観経』をどう見たか、ということが重要になります。少し説明しますと、王舎城の悲劇の後、お釈迦様は韋提希の歎きを受けて浄土を見せました。その世界を見た韋提希が「釈尊亡き後の者たちが浄土を見たい時にはどうすればよいのか」と尋ねた。それに対して説かれたのが『観経』の本文である「定善」「散善」の部分です。「定善」は定・三昧、この身で浄土を観察する善。「散善」は、普通の心の状態での往生浄土を目指すという善です。その中で、浄土に生まれる人間が九種類に分けられるのですが、その区分によって行者が臨終来迎を受ける様子も変わってくると説かれています。

しかし、そういった善による救いは、釈尊が本当に言いたかったことではないと、善導大師は了解されました。そのことを

重んじた親鸞聖人は、  
善導大師証をこい

定散二心をひるがえし  
貪瞋二河の譬喩をとき  
弘願の信心守護せしむ

『聖典』四九五頁

と表しておられます。

『観経』の本文の大部分には、自力で浄土に往生することが述べられています。ですから、「善いことをしたら浄土へ行ける」という考えは正しい」という心(定散二心)を持つて『観経』で説かれる救済を見てしまいます。善導大師はそれに対し、『観経』の結びの言葉「汝好くこの語を持て。この語を持てというは、すなわちこれ無量寿仏の名を持てとなり」(『聖典』一二二頁)を受け、仏は「定善・散善」ということを通して、実は念仏ということ、を言いたかったのだと。自力ではなく、他力なのだと、内容をひっくり返しているのです。

「定善・散善」というものがあるけれども、これは自力だと理解することが、善導大師の示された救いなのです。善いことをして善い結果が出るということを死後にまで求めている私だということを明らかにし、そこから解放されるということです。この第十九願を第十八願が摂取するという形で『観無量寿経』を読んでいくという立場こそ、親鸞聖人が善導大師からいただいたものだと思います。

## 尾張の真宗史

真宗門徒とお内仏の歩み  
—名古屋教区内の法宝物を通して—

研究員 小島 智  
こじま さとし

真宗門徒の家にあるお内仏（仏壇）は、どのようにして成立したのであるか。今回、筆者に与えられた課題はその経緯を尋ねることである。

ただ、この問題については、すでに二〇〇六年に同朋大学仏教文化研究所において「真宗道場から寺院へ、仏壇へ—実物資料に学ぶ仏教文化Ⅱ」と題する企画展示が催されており、その図録には蒲池勢至氏の「真宗道場の発展と収縮—寺院と仏壇の成立—」、並びに脊古真哉氏の「道場本尊と内仏の分離」という解説論文も収録されている<sup>(1)</sup>。よって本稿では同展の成果に学びつつ、名古屋教区内に伝わる法宝物史料を例にあげながら、真宗門徒とお内仏の歩みを垣間見ることにする。

## 一、内仏本尊のはじまり

まず、脊古氏の前掲論文によれば、戦国時代の証如上人期の本尊・阿弥陀如来絵像「方便法身尊像（形）」に、それ以前のものとは違う特徴が現れるようになり、それは道場本尊ではなく、「家」の本尊—内仏本尊として下付されたことによるという。具体的には証如上人期に、夫婦と推測される男女が願主として連記された裏書のある、方便法身尊像が見られるようになること、そして方便法身尊像の像様そのものに変化が見られるようになることであるという。以下、紙幅の都合もあるので、方便法身尊像の像様の变化、それも特に小幅の方便法身尊像が多く見られるようになることを、実際の戦国時代の内仏本尊から確認しておこう。

周知のように、本願寺下付の方便法身尊像・御影には裏書が施され、主題名、本願寺住持の署判（署名と花押）、下付年月日、そして充所と願主名が記される。その裏書があることによって下付年代を特定することができる訳だが、本稿執筆に

あたり筆者は、当センターの旧蓮如上人研究班スタッフが所蔵する、証如上人裏書・小幅方便法身尊像三幅、また後継の頭如上人裏書・小幅方便法身尊像四幅を調査させていただいた。どれも「百五十代」程度の大きさであり、内仏本尊として相続されてきたものと見られる。脊古氏も言われるように、このような小幅方便法身尊像は最初から道場本尊ではなく、内仏本尊として下付されたと推測されよう。そこで、それら七幅のうち、後世の補修があまり加わっていないものを、証如上人期、頭如上人期ともに一幅ずつ紹介しておきたい〔写真A・B〕。

## 二、内仏の流布—本尊と『御文』

では、証如上人期に誕生してくる内仏本尊が、門徒宅にひろく普及するのはいつ頃のことなのか。名古屋教区には、それを窺うのに最適な史料が伝存している。一宮市・正福寺蔵の『御本尊之帳』である<sup>(4)</sup>。これは正福寺門徒の本尊裏書記録で、寛永二（一六二五）年より書き始め

## A 方便法身尊像（証如上人裏書）

絹本着色・掛幅装 縦三四・五×横一五・三  
総高二〇・九、仏身高一四・〇（単位cm）<sup>(2)</sup>

\*個人蔵

「方便法身尊形」の主題と証如上人の署判のみが木版で付され、下付年月日、充所、願主名は省略されている。証如上人期以降、このような形式の裏書が見られるようになり<sup>(3)</sup>、それだけ本尊の需要が増していたことが窺われよう。また、阿弥陀如来絵像の截金文様は斜格子文で、脊古氏によればこれも証如上人期に多く見られるようになるという。



同 裏書 紙本墨書

縦二六・八×一七・五



本願寺釋證如（花押）

方便法身尊形

られ、元禄十五（一七〇二）年二月二十日付の記録で終わっている。方便法身尊像九三幅の裏書記録があり、脇掛の名号や『御文』の存在、門徒の在所と俗名までもが書き込まれ、六字名号を本尊として三軒の記録もある。それ以外に、木尊像一体、親鸞聖人御影二幅、蓮如上人真影二幅、教如上人真影二幅の裏書記録があるが、ただこれらは、正福寺末の

道場かそれが寺院化したところのものと推測される<sup>(5)</sup>。さらに、元禄年間に「御名号持佛堂御祝」「御聖教持佛堂御祝」「持佛堂御祝」と記された例が一軒ずつある。そこで、この『御本尊之帳』にある方便法身尊像九三幅の下付年代を整理してみたい。ただ、このうち最も古い実如上人期の一幅と証如上人期の一幅は、内仏本尊ではなく道場本尊と推測され、なお

かつ一如上人署判で、同じ方便法身尊像を別の門徒が受け継ぎ、重複している事例が一つある<sup>(7)</sup>。よってこれら三幅を除いた、内仏本尊と判断する九〇幅の下付年代を、下付者である本願寺住持特別にまとめる<sup>(8)</sup>と次のようになる。

| 歴代住持（尊称略）〔就任〕        | 方便法身尊像 |
|----------------------|--------|
| 証如〔10代 大永5（1525）年～〕  | 7幅     |
| 顕如〔11代 天文23（1554）年～〕 | 3幅     |
| 教如〔12代 文禄元（1592）年～〕  | 13幅    |
| 宣如〔13代 慶長19（1614）年～〕 | 30幅    |
| 琢如〔14代 承応2（1653）年～〕  | 4幅     |
| 常如〔15代 寛文4（1664）年～〕  | 11幅    |
| 一如〔16代 延宝7（1679）年～〕  | 21幅    |
| 真如〔17代 元禄13（1700）年～〕 | 1幅     |

\* 記録は元禄15年で終了  
\* 教如上人以降は東本願寺歴代

これにより、教如上人期以降、それも近世初期に内仏本尊が急速に流布していく様子が確認できよう。それは蒲池氏も指摘されるように、中世真宗の念仏道場が寺院化していくのと並行してであったと考えられる。さらに、「御文教如判廿八通」<sup>(8)</sup>というように、「御文」についても本尊記録に付随して二三点記録されている。本願寺下付の「御文」も末尾に住持の署判が施され、それによつて年代を特定することができるが、下付者が不明な二点を除いて、教如上人期八点、宣如上人期一〇点、琢如上人期二点、一如上人期一点の記録が確認できる。ここから教如上人期以降、「御文」も門徒宅へ流布していったことが窺えるのである<sup>(9)</sup>。最後に、「持佛堂御祝」の記録に触れておきたい。この「持佛堂」は蒲池氏が言われるとおり仏壇のことで、「御祝」も仏壇開き（入仏法要）のことと推定されるが、これについて、註(1)図録で蓮如上人末子・

## B 方便法身尊像（顕如上人裏書）

絹本着色・掛幅装 縦三五・〇×横一三・一  
総高二二・九、仏身高一六・一（単位cm）  
\* 個人蔵

表画の上下両端が、後世の仏壇に合わせて切り取られている。これも「□便法身尊形」の主題と顕如上人の署判が木版で付され、下付年月日、充所は省略されている。ただ、願主名の「願主釋」が木版で付されており、その下に墨書で願主名が記されている。また、阿弥陀如来絵像の截金文様はA同様斜格子文である。



## 同 裏書 紙本墨書

縦二九・八×一五・二



本願□釋顯如（花押）

□便法身尊形

願主釋□□

れなくなつていったと考えられよう<sup>(11)</sup>。

## むすびにかえて

概略、このような歩みで、真宗門徒のお内仏は普及していったと思われる。それは真宗の信仰文化として継承されていくべきものである。ただ近年の住宅事情などにより、相続されてきたお内仏を手放すケースが増えているのも確かである。しかしその場合でも、新たに迎えるお内仏が受け継がれていくべきものとなる。それもまた、法義相続の象徴としての「法宝物」なのである。

(1) 同朋大学仏教文化研究所・二〇〇六年秋期企画展示『真宗道場から寺院へ、仏壇へ―実物資料に学ぶ仏教文化Ⅱ』展図録所収。

(2) 総高は阿弥陀如来像の光輪頂点から蓮台最下部まで、仏身高は頭部頂点から爪先までの高さである。

(3) 『真宗大谷派名古屋教区教化センター研究報告 第四集 蓮如上人と尾張』（二〇〇〇年）参照。

(4) これは『正福寺門徒本尊控帳』の題名で、『新編一宮市史 資料編六』（一九七〇年）に翻刻されているが、もとの表題は『御本尊之帳』であり、註(1)図録でもその名称で一部写真が掲載されているので（番号一六）、それに従った。さらに、二〇一六年の真宗大谷派名古屋教区・名古屋別院宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要記念『親鸞聖人と尾張門徒―その信仰のすがた―』展図録にも掲載されている（番号六三）。なお内容についても、すでに蒲池勢至氏が詳細に分析されており、『真宗と民俗信仰』（二九九年、吉川弘文館）第一章第四節「オソブツと真宗仏壇の成立」、前掲論文でも考察されている。そのため、改めて論及する必要もないと思われるが、お内仏の普及状況を知る重要史料なので、蒲池氏の論稿を参考にしながら、紹介の意味で筆者なりに少し論じてみたい。

(5) 『新編一宮市史 資料編六』二八三、二八五、二八九―二九二、二九八頁。註(4)蒲池氏論稿参照。

(6) 『新編一宮市史 資料編六』三〇六、三〇九頁。『新編一宮市史 資料編六』二九七、二九八、三〇五、三〇八頁。註(4)蒲池氏論稿参照。

(7) 『新編一宮市史 資料編六』二七二頁。

(8) 正福寺門徒ではないが、実際に門徒宅へ下付されたと思われる教如上人判「御文」が、註(4)図録に掲載されている（番号六七）。

(9) 『真宗史料集成』第三卷（一九八三年、同朋舎出版）七五七頁。

(10) また「御本尊之帳」にある、先述の一如上人署判の方便法身尊像が別の門徒に受け継がれた事例で、元禄六年十一月十日に「持佛堂并三ツ具足共二」受け継がれたことが記されているのにも注目される（『新編一宮市史 資料編六』三〇八頁、註(4)蒲池氏論稿参照）。

現代社会と  
真宗教化

東日本大震災から6年

## 何を「忘れない」のか？

名古屋教区教化委員会 災害ネットワーク研修

今年で五回目を数える名古屋教区教化委員会都市教化部門の災害ネットワーク研修。今回は「〴〵助けてください」から五年半 もう一度聞こう 福島の声」というテーマのもと開催された。事前学習会（二月十一日）、現地研修（二月三十日～三十一日）、ふりかえり学習会（二月二十二日）の中で出あった「福島の声」を紹介する。

## 【〴〵直ちに健康に影響はない〴〵】

福島県二本松市の眞行寺住職、佐々木道範さんは原発事故当時をふりかえり、「政府の〴〵直ちに健康に影響はない〴〵という言葉にどこか気持ち悪さを感じていた。しかし原発から50km離れている二本松では、大半の人々がその言葉を信じていた」と語る。

正しい情報が得られないまま、ライフラ



「誰も信用できなかった」から、NPO法人チーム二本松を立ち上げ、現在も除染や放射線測定など活動続ける佐々木さん

## 【最初は他人事だった】

佐々木さんの義理の姉、大橋さんも「放射線の危険性も分からなかったし、二本松まで飛んでくるとは思わなかった。浜通り（福島県沿岸部）の人たちは気の毒だな、と他人事のようにだった」と語る。そして「無関心で無知だった自分を悔やんだ」と、我が子に対する自責の念を吐露された。

そして、震災当時中学一年生だった次女が高校へ進学するのを契機に、神奈川の叔母の元に預け、母子離ればなれの生活

インが断たれた人々は放射性物質の降り注ぐ中、各地に設置された給水所に並んだ。ミルクやオムツが無くなっていく不安に駆られた母親たちは、乳飲み子や未就学児を家で留守番させておくこともできず、一緒に何時間も外で順番待ちをした。佐々木さんは「外へ出ないでください、マスクをしてくださいと、なぜ伝えてくれなかったのか。今でも僕の中に怒りはあります」と語った。



子どもを避難させることを決断  
「私の家庭でも分断が起きてしまった」と語られた二本松市の大橋さん

を決断。義理の母からは「みんな大丈夫って言っているし、私の周りの人は誰も避難なんかしてないじゃないか」と責められ、「孫の成長を傍で見守ることを楽しみしていた義母の生きがい」を奪った自身の決断に苦しんだ」と、涙ながらに語られた。

そして、避難した次女はいじめにあっていた。「月一回会ったばかり、もう高校生になるのに膝枕を求めたり、私の手をずっと握って離しませんでした。健康第一で決断した避難ですが、本当によかったのだらうかと悩みました」。

## 【いつまで続くのだろう】

震災時、お腹に臨月の赤ちゃんを宿した妻と二人のお子さんを妻の実家へ避難させた松本さんは、震災から六年弱が経過した今も離ればなれで暮らしている苦悩を語られた。

「毎月一回、青森まで車で五時間かけて妻子に会いに行きます。往きはいいんです。でも帰りが辛い。五年間、ずっと同じことを考えています。いつまでこれが続くのか。いつになったら一緒に暮らせるのだろうか。このまま車をぶつけて楽になりたいと、思ってしまう。子

どもたちはいつの間にか大きくなって、僕の知らない津軽弁も話します。やっぱり寂しいですね」  
そんな分断された生活の中、青森の学校で中二の次男がいじめにあった。不登校となり、一年間ずっと一人で部屋に引きこもった。「男の子なんで、理由は言いません。最初『父ちゃんへの代わりを頼むお母ちゃんのこと頼む』と言ってしまいました。子どもが辛い時、父親として何もしてやれませんでした」と、声を詰まらせた。



妻子を青森に避難させ、一人で二本松に残って仕事を続ける松本さん  
「離ればなれってこういうことなんだな」と辛い思いを話して下さった

## 【子どもを放射能から守りたい】

避難することなく福島県で生活を続ける決断をした渡辺さん（二児の母）は、子どもたちを放射能から守ることに必死だった。

「どうして外で遊べないの？ マスクなんかいらんよ！」という子どもたちにも、目に見えず、匂いもなく、痛みもない「放射能」の危険性をどうやって伝えたいのか。親たちの葛藤は増すばかりだった。そして、外で遊ばせられない状況を補填するため、休日に遠方の公園へ連れていくことに躍起になった。

それは「子どもたちのためというより、自分の安心感のためだった」。親の責任というストレスに押しつぶされそうだった。何気ない家族のお出かけすら、いつしか当たり前前の楽しい日常ではなくなってしまった。



二本松市で家族一緒に暮らすことを決断した渡辺さん  
今、福島では放射能のことを話さづらくなっていると語られた

## 【もう帰れません】

福島第一原発から3 kmほどにある正福寺（仙台教区浜組）では、本堂が地震によって大きな被害を受けた。国からの避難指示範囲が3 km、10 km、20 kmとどんどん広がっていく中で、避難場所を転々とした。六月頃になり、散り散りになったご門徒から法務の連絡が入りだす。参列者の姿は綺麗な喪服ではなく、汚れた服での葬儀だった。そのような状況を鑑み、多くのご門徒が避難しているいわき市から車で一時間半の範囲に土地を探しお寺の再建に動き出した。福島県須賀川市に仮本堂を建て、二〇一五年には報恩講を勤めた。二日間で延べ百人ほどのご門徒が駆けつけてくださった。しかし「なぜこんな遠いところにしたんだ」という声に胸を痛めた。坊守の松本さんは「もう双葉には帰れません。震災前に比べて三割ほどのご門徒と縁が切れてしまった。で



須賀川市に建立された正福寺仮本堂



お話しくださった正福寺住職と坊守の松本洋子さん

もここでやっていくしかない」と必死に前を向こうとしていた。

## 【忘れてしまいたい】

佐々木さんは「僕の間感ですが、二本松市では七割くらいの方がもう大丈夫、と思っている」という。それは「もうこれ以上放射能のことを考えたくない」という悲痛な声の裏返しだろう。松本さんは「ずっと放射能につきまとわれている気がする。どこまでいっても抜け出せない。逃げられない。しかし、放射能の危

険性より、ただ家族と一緒に暮らしたいという思いがどんどん強くなっていく」と内心を語る。渡辺さんは「だんだん慣れてきて、モニタリングポストがただの温度計に見えてくる」「保護事業などは、福島がまだ危険だということの証だからやらないでくれ、復興の妨げになる、という人もいる」と話された。積み重なった疲労の末の、もう忘れたらいいという気持ちをみな理解できるだけに、不安や葛藤など、本音を素直に分かち合える場がなくなっていく。正しさもゴールも見えない中で、各々の苦悩を抱えこんだまま、次第に孤立化が加速していると感じた。



車中、佐々木さんは、放射線量計測器をずっと握りしめていた

今回の同朋社会支援事業で聞いた声はごく一部であり、まだ届かない無数の声がある。その一人ひとりの声の背景に、それぞれの人生があり、苦悩がある。その無数の声と私自身との、どこに「同」が成り立つのだろうか。

親鸞聖人は『五会法事讃』の「如来尊号甚分明」という言葉を釈し、

「分」は、わかつという、よろずの衆生ごとにとわかつこころなり

『唯信鈔文意』 真宗聖典 五四七頁

と、如来の名号が開く世界を教えてください。その「わかつ」とはひとりぼっちの孤立ではないだろう。如来のはたらきによって、代わることでできないわが身を引き受けた独尊の歩みが、各々に開かれるということだろう。だとすれば聖人が語る同朋とは、何かに依存しあった限定的な仲良し集団ではない。

佐々木さんは「踏んづけられてはじめて、何かを踏んづけてきた自分にハッとした。踏んづけられ、踏んづけ続ける自分に『われら』と呼びかけ、『俺たち幸せになりたいよな』と背中をさす聖人の声が聞こえた」と語られた。

その、傍観者でも中立者でも迎合者でも敵対者でもない、去来現のあらゆる人々と朋なる「われら」という大地は、生きる意義と生まれた喜びを喪失した私自身の「助けてください」という叫びの先に開かれるような気がしてならない。

最後に、二日目の日程に同行し、案内してくださった木ノ下秀俊（仙台教務所非常勤嘱託）さんの声を紹介したい。「被災地や我々現地の者を『忘れない』のではなく、あの日あの時、みなさんが守りたい、抱きしめたいと想ったその人との想いを『忘れない』でください」

（研究員 大河内真慈）

研究生 現地研修 2017年3月6日

## 私にとって真宗本廟とは

—両堂の歴史を学び、御修復の願いにふれる—

名古屋別院主催のもと、教化センター研究生の案内による真宗本廟日帰り参拝を行った。総勢47名の参加者と共に、両堂のお荘厳に表現される意味と作法を確認した。

午後からは渉成園(閨風亭)にて研究生による真宗本廟クイズ大会を開催し、「親鸞聖人御真影の念珠の持ち方は?」「真宗の本尊はどれ?」などを出題。司会者が台本を忘れるハプニングもあったが、かえって場が和み、静かな渉成園に笑い声が響き渡った。

参加者からは「今度は私が出題者となって友達にクイズを出したい」「今回の御修復で降ろされた明治瓦が、境内のベンチや花壇などにも再利用されていることを聞き、知らずに参拝していたときは違う思いがわいてきた」という言葉が印象に残った。



事前に準備したパネルでクイズを盛り上げた

第28回平和展 報告

「仏教の社会活動」  
—『満洲侵略』と大谷派—

期間:2017年3月17日(金)~23日(木) 会場:名古屋教務所1階 議事堂

今年の平和展は、【十五年戦争】と呼ばれる時代の前期にあたる「満洲事変」期を中心に、当時の大谷派と社会との関わりを確認。七日間でおおよそ600名を数えた来場者とともに、大谷派が「戦時」という時代社会に応じて「満洲」の地で行った「活動」の軌跡を、現代という時代社会に生きる私たち一人ひとりの在り方を照らす鏡として見つめる機会となりました。

また、開催二日目に当たる3月18日(土)には、長野県の満蒙開拓平和記念館から講師を招き、特別学習会として「満蒙開拓」の概説を学びました。僧侶とは異なる視座から大谷派の「活動」について学ぶことで、「大谷派と戦争」という研究テーマについて、新たな問いを与えられたように思います。(※特別学習会の抄録は次号に掲載予定)

「晒された生首」と題された写真を見つめる観覧者  
隣の名号には「朝家の御ため国民のため」と記されている

## INFORMATION

## 教化センター日報

■2016年12月~2017年2月

- 12月5日 研究業務 現代社会と真宗教化「自死者追悼法要」後援  
6日 研修業務 研究生実習「真宗門徒講座④」  
8日 研究業務 平和展学習会  
9日 研修業務 研究生研修「聖典研修②⑩」竹橋太氏  
19日 研究業務 平和展学習会  
22日 研究業務 現代社会と真宗教化「自死者追悼法要反省会」参加  
1月10日 研究業務 平和展学習会(構成会議)  
11日 研修業務 研究生研修 教化委員会「災害ネットワーク研修」に参加

- 13日 研修業務 研究生実習「真宗門徒講座⑤」  
19日 研修業務 研究生研修「聖典研修②」廣瀬惺氏  
23日 図書整理(〜2月9日)  
教務所・教化センター報恩講  
30日~31日 研修業務 教化委員会「災害ネットワーク現地研修」に参加  
2月2日 研修業務 研究生研修「全国人権啓発研究集会(〜3日)」に参加  
8日 研修業務 研究生研修「真宗本廟(東本願寺)団体参拝引率事前研修」  
10日 教務所・教化センター職員研修  
13日 研修業務 研究生実習「真宗門徒講座⑥」  
15日 研究業務 平和展学習会(平和展パンフレット校正会議)  
17日 研修業務 研究生研修「聖典研修②」竹橋太氏  
22日 研修業務 研究生研修 教化委員会「災害ネットワーク研修」に参加

## 4月1日(土)から土曜日も休館いたします

「名古屋教区教化センター使用規程」の変更に伴い、教化センターの使用及び書籍・視聴覚教材の利用の受付について、日曜日(祝日及び別に定める休日を含む)に加えて、**土曜日も休館**とさせていただきます。

これまで土曜日にご利用いただいております皆様方にはご不便をおかけいたしますが、何卒ご理解・ご協力をお願いいたします。

## 2017年度真宗門徒講座

## はじめての「歎異抄」— 親鸞聖人のお言葉にふれよう —

荒山淳(教化センター主幹)と教化センター研究生および研究生OBによる真宗門徒講座(名古屋別院主催)がはじまります。有縁の方お誘いあわせの上、ご参加ください。

講 師: 荒山 淳(教化センター主幹)・

教化センター研究生および研究生OB

会 場: 名古屋教務所議事堂

時 間: 午後2時~4時

参加費: 1回300円

年間予定

- |           |     |           |      |
|-----------|-----|-----------|------|
| 4月27日(木)  | 序分  | 11月15日(水) | 第6条  |
| 5月26日(金)  | 第1条 | 12月6日(水)  | 第7条  |
| 6月30日(金)  | 第2条 | 2018年     |      |
| 7月21日(金)  | 第3条 | 1月26日(金)  | 第8条  |
| 9月15日(金)  | 第4条 | 2月16日(金)  | 第9条  |
| 10月20日(金) | 第5条 | 3月13日(火)  | 第10条 |

## 《雑感》

『センタージャーナル』が、このたび第100号を迎えた。100号を記念して「インフォメーション蓮如」No.3(本願寺歴代花押一覧)を、あらためてレイアウトを変えて挟み込みとさせていただきます。

月忌参りなどで古いお内仏にお参りさせていただくと、不思議と様々な妄想が頭をよぎる。たとえば、「釋宣如」と書かれた「御文」を拝読していると、車も新幹線もない350年前、京都の本山からどのように、この「御文」が辿り着いたのか。そして、その間にこの仏前で脈々と営まれてきた家族の歴史など...

近頃、先祖が建てた家を処分し、マンションなどに移り住む方が増えてきた。これに伴い尾張地方に相続されてきた「お内仏」も失われつつある。たとえ住宅事情が変わっても、「お内仏」が相続されてきた歴史の重みは伝えたい。挟み込みの「御歴代花押一覧」と「本願寺関係略系図」が、先達の願いに触れる一助になればと思う。

(H)

## ■教化センター

〈開 館〉月~金曜日 10:00~21:00  
(土曜日・日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間

~お気軽にご来館ください~

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ【お東ネット】<http://www.ohigashi.net>

■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

お東ネット

検索

|                                                                                                                                                |                                                                                                                                                 |                                                                                                                                                 |                                                                                                                                                  |                                                                                                                                                   |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>22世 現如 <small>（二八八九―一九〇八）</small><br/>在職期（二八八九―一九〇八）</p>    | <p>18世 從如 <small>（二七四四―一七〇〇）</small><br/>在職期（二七四四―一七〇〇）</p>    | <p>16世 一如 <small>（二六七九―一七〇〇）</small><br/>在職期（二六七九―一七〇〇）</p>    | <p>12世 教如 <small>（二五九一―一六四四）</small><br/>在職期（二五九一―一六四四）</p>    | <p>8世 蓮如 <small>（四四七―一四九〇）</small><br/>在職期（四四七―一四九〇）</p>       |
| <p>23世 彰如 <small>（一九〇八―一九三五）</small><br/>在職期（一九〇八―一九三五）</p>   | <p>19世 乗如 <small>（一七〇一―一七九二）</small><br/>在職期（一七〇一―一七九二）</p>   | <p>教如上人署判(写真)</p>                                             | <p>13世 宣如 <small>（一六四一―一六五三）</small><br/>在職期（一六四一―一六五三）</p>   | <p>9世 実如 <small>（四九〇―一五三五）</small><br/>在職期（四九〇―一五三五）</p>      |
| <p>24世 闡如 <small>（一九二五―一九九三）</small><br/>在職期（一九二五―一九九三）</p>  | <p>20世 達如 <small>（二七九二―一八四六）</small><br/>在職期（二七九二―一八四六）</p>  | <p>あなたの家に伝わるお内仏のご<br/>本尊・お名号・『御文』を確認し<br/>て時代を調べてみませんか？</p>                                                                                     | <p>14世 琢如 <small>（二六五三―一六六四）</small><br/>在職期（二六五三―一六六四）</p>  | <p>10世 證如 <small>（一五二五―一五五四）</small><br/>在職期（一五二五―一五五四）</p>  |
| <p>25世 淨如 <small>（一九九六―）</small><br/>在職期（一九九六―）</p>          | <p>21世 嚴如 <small>（一八四六―一八八九）</small><br/>在職期（一八四六―一八八九）</p>  | <p>17世 真如 <small>（二七〇〇―一七四四）</small><br/>在職期（二七〇〇―一七四四）</p>  | <p>15世 常如 <small>（二六四一―一六七九）</small><br/>在職期（二六四一―一六七九）</p>  | <p>11世 顕如 <small>（一五五四―一五九二）</small><br/>在職期（一五五四―一五九二）</p>  |

